

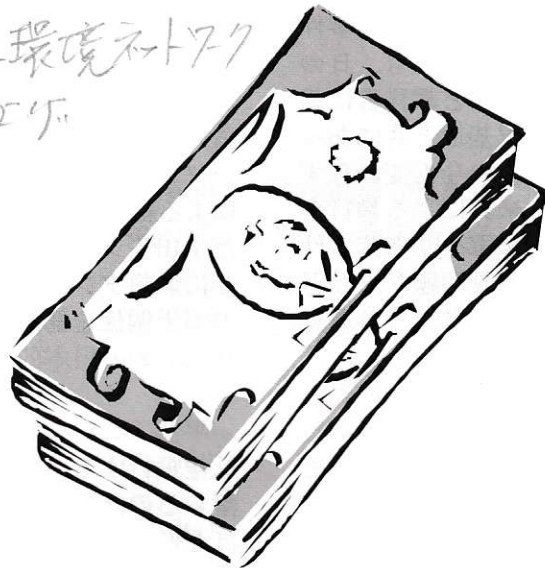
■おきなわ環境ネット■

沖縄環境ネットワーク通信 38号

1996. 日本環境会議 沖縄大会

1997. 沖縄環境ネットワーク

立ち上げ



特集／2008年 沖縄・日本・韓国共同

米軍基地環境調査研究 国際シンポジウム

韓国視察から国際シンポジウムまで

当日の講演内容から～

2008第一次沖縄平和紀行から帰って①

2008第一次沖縄平和紀行から帰って②

沖縄から帰って思うこと

… 親川 志奈子

… 高橋 年男

… いちご

… 李 相守

… クォン・オキ

総会資料

《環境情報おきなわ》

韓国視察から国際シンポジウムまで

親川 志奈子

2007年11月、二度目の韓国。降り立った韓国が一度目とは違いピリリとしたものに感じたのは、それが寒空の下に身を置いたからというだけではないらしい。私達が目指したものはキムチ博物館でもイ・ビョンホンのコンサートでもなく、それは米軍基地だった。いや、正確には米軍基地の隣に暮らし、米軍基地に苦しまれている私たちの仲間たちに会いに行くという名目だ。

去年の私は26歳。沖縄に生まれたけれど沖縄戦はおろか、復帰運動も知らない。由美子ちゃん事件(注1)も、燃える井戸(注2)も、コザ暴動も、日の丸焼き捨ても、私は見ていない。けれど教科書に載らない大事な沖縄戦後史が常に米軍基地と共にあったことを私は知っているし、2008年の今も変わらずそうあり続けていることを、私は米兵による暴行事件や、SACO合意、爆音訴訟、米軍ヘリ墜落事件、辺野古の基地や高江のヘリパッド建設問題などなど、リアルタイムで接した数限りない非日常な日常を見て知っている。

けれども、内側から見るとその地獄の様な沖縄も、外から見ると楽園に見えるという奇異な構図がある。私はやっとそのことに胸を痛める年頃になった。そしてニュースではやらない韓国の米軍基地について知ることとなった。私達の目に、問題ではなくチャングムやヨン様を映そうと頑張る「何か」の存在を感じながら、そしてその「何か」が同じ手法で沖縄ブームを巻き起こし、沖縄の楽園の部分だけを愛する人たちを作り出したということを確認しながら、私は韓国行きの飛行機に乗った。素直に韓流ブームに乗る無邪気な日本の私が、韓国で見るものは何か、そして目を凝らしても見えないものは何か、そういうことをとことん考えてみようと思った。

韓国訪問団は団長の高橋年男さんをはじめ、俞漢子(ユ・ヨンジャ)さん、照屋久子さん、金治明(キム・チミョン)さん、本永貴子さん、岡田耕子さん、知念 智さん、そして私の総勢八人。この素晴らしいメンバーと共に視察が出来たことを本当に幸運だと思っている。

韓国では、まず群山(クンサン)に行った。紅葉したイチョウが美しいその群山米軍基地被害相談所では、ムン・ジョンヒョン神父や相談所の皆さんが迎えてくれた。土地も文化も言葉も違えど同じ構図で悩み、同じ目標を持ち生きなければならない私たち。嬉しくて切ない出会いだった。町を歩くと嘉手納の道の駅よりもフェンスに近い所に住民の集会場があった。そこからは滑走路とタッチ&ゴーをする戦闘機が見えた、騒音測定をすると110デシベルだった。

そこには基地拡張の為、時価の7割程度のお金を握らされ立ち退きを命じられついには強制的に土地を追われる運命にあるという住民の姿があった。次に向かったセマングム干潟もまた酷いものだった。巨大干潟を埋め立てるべく33キロにも及ぶ堰が作られた。干潟はかつて、小さくも豊かな漁村の風景を作り出し住民を生かしたが収穫量は20分の1に落ち込み、干上がった魚場には漁師達が所在なさに座っていた、空にはF16。泡瀬同様明瞭な予定のないまま工事が進み、農地や工業地など使用目的を二転三転させ、今では米軍基地拡張という名目で一部土地が確保されている。住民を潤すはずの埋め立ては彼らの職を奪い彼らを追い出すものとなっていた。

ソンチョンやナンスラでは、基地から流出した油による絶望的な土壌汚染の現実があった。油膜の貼った水田やフナが全滅した養殖池の側にはフェンス越しに燃料タンクが聳え立っていたが、米軍は基地との因果関係を認めず、市当局による水道工事は行われたものの根本的な解決に至っていない。

平澤(ピョンテク)では、まずソンファに行った。低空飛行するヘリで屋根の瓦が飛び、室内の電球が落ちるのだと言う。三階建以上の建築物を作れないほど低空飛行するヘリは、騒音だけでなく家畜が子孫を残せないほど深刻な振動や風圧の被害をもたらす。現在ソンファの二里の住民全員で騒音訴訟を提訴している。

次に向かった先はテチュリ、そして強制移住させられたテチュリの人々のうち44世帯が暮らすアンジョンリ。団地の一角でキムジャン(注3)をするハルモニたち。三枚肉を挟んだ出来立てのキムチを私の口に放り込んでくれた。とても美味しいそのキムチの材料を彼らはスーパーで購入している。安い立ち退き料で土地と家と畑を奪われた彼らは政府の用意した家に家賃を払い住んでいる。畑や家畜がないので食品を買わなくてははいけない。食べるためにお金が必要になった彼らに政府はティッシュ配りの仕事を斡旋した。なんということだろう。

次に行ったオサン空軍基地周辺はあまりの爆音のためゴーストタウンと化していた。伝統的集落を離散させた後、政府はその土地を米軍基地のための保留地として収用する。

ソウルからは神奈川県相模原市議の金子豊貴男さんも同行し、かつては南北朝鮮を結んでいた鉄道が途切れているシントルリ駅を経由し北朝鮮との軍事境界線にあたる台風展望台を目指した。物々しいゲートをくぐり、両側に地雷原が迫る道路を車で駆け上がる。

無敵台風部隊の展望台からは美しい山々が見えた、目と鼻の先には北朝鮮。対北という名目で置かれる米軍基地だが、非武装地帯には米軍はない。「平和を望むなら戦争に備えろ」のスローガンは気分を沈ませるに十分だった。DMZの兵士が「英語が出来るか」と聞くので「ああ」と答えるととても嬉しそうに「僕はカナダで大学生だった、徴兵されたがよく働いたから一ヶ月早く除隊できるんだって、早くカナダに戻って勉強したい」と言った。二十歳の彼のそのあどけない笑顔と軍服と、その手に持つ機関銃とがあまりにも不釣り合いで泣きたくなった。

車に乗り込み下山する途中、タンチョウの群れが川辺で羽を休める姿に出くわし車を止め写真を撮った。ヤンバルの北部訓練場よろしく、ここもまた非武装地帯という名の手付かずの大自然が残る場所だ。基地の外は基地経済によって破壊されていき、基地の中では自然が残るというこのアイロニックな状況を作ったのもまた、米軍基地だ。

ソウルに戻り、ヨンサン基地へ。深刻な水質・土壌汚染を生んだ石油流出事故の現場に行き街の中に設置された水質浄化槽を見た。他にもヨンサン基地では韓国人の軍雇用員に8千人分の致死量のホルムアルデヒドを排水口から廃棄させた事件も起こった。環境NGOの「グリーン・コリア」(緑色連合)への告発で明らかになったその事件は不起訴になり、軍雇用員解雇という最悪な結果で幕を閉じた。一連の環境汚染について米軍側は環境浄化費用を負担すると宣言するも未だ守られず汚染は放置されたままだという。

「米軍再編」という四字熟語に翻弄される日韓政府。米国に追従し安全保障など勇ましい言葉を発するのは蓋を持つ人々。テチュリや宜野湾やヨンサンや相模原や辺野古やクンサンに住む蓋を持たない私たちは、彼らの意のまま「臭いもの」とされ蓋をされる。法律や人権や安全や自然保護は全て、蓋の上に存在するもの、私たちがその恩恵にあずかれることはない、それが米軍基地の仕組みだ。米軍再編とはすなわち汚染された土地を返還し住民を追い出し自然を破壊して新基地を造ること、そして蓋をすること。そのことが痛いほど身にしみたツアーだった。

帰国後すぐにミーティングを開き、訪韓調査団として報告書を作成することにした。これまで何度も行き来した沖縄・韓国そして日本の調査団の報告をまとめシンポジウムという形で沖縄から発言しようとして企画した。沖縄大学学長の桜井国俊さん、沖縄国際大学教授の佐藤学さん共同代表によるシンポジウム実行委員会が発足し、視察団や沖縄環境ネットワーク、その他様々な団体、個人の働きで、今年4月12日に沖縄国際大学にて「2008年沖縄・日本・韓国共同米軍基地環境調査研究国際シンポジウム」を開催する運びとなった。

桜井さんの在沖米軍基地の全体像を把握できる素晴らしいプレゼンテーションにはじまり、沖縄、韓国、神奈川の米軍基地や基地から発生する環境汚染の現状を共有できる六時間にも及ぶ有意義なシンポジウムとなった。

国際シンポということでパワポイントや資料は、日・英・韓の三ヶ国語で準備され当日は同時通訳がついた。沖縄からは伊波洋一宜野湾市長の「ACUIZ」についての解説、真喜志好一さんの「辺野古・高江」の分析、伊波義安さんが「枯葉剤・水源汚染」について話し、内海正三さんが「コートニー鉛汚染」について説明してくれた。

また加藤 裕弁護士が「サンフランシスコ連邦裁判所ジュゴン判決の意味」の特別講演をしてくれた。神奈川からは沢田政司さんが「神奈川の基地問題」と題し地理的な解説を含めた概要を紹介し、金子豊貴男さんが「厚木基地」の報告、新倉裕史さんは「横須賀」について話し、沖縄以外の在日米軍基地の実態、原子力空母の問題について学ばせてくれた。神奈川の綿密な調査方法と情報提供の手法、多くの住民を原告にした爆音訴訟について、詳しく知ることが出来たのはとても貴重だった。

韓国の徐載哲(ソ・ジェチョル)さんは「韓国における返還予定地の環境浄化費用は確認しているだけで約720億円、地下水の汚染状況によっては天文学的数字となるだろう」と発表、ユン・チョルスさんは「解決には地位協定改正をし、原因者が被害回復の責任を負う必要がある」と力強く述べ、姜相源(カン・サンウォン)さんは「米軍基地再編により平澤への被害は1.7倍に増える恐れがある」と報告した。

最後に緊急報告として本永貴子さんが先の少女暴行事件について言及した。ムン・ジョンヒョン神父は連帯を呼びかけ歌を歌い、佐藤学さんの挨拶でシンポジウムが幕を閉じた。理不尽な環境汚染の現実について共有し互いの活動の手法を学びあい、環境汚染の原状回復を基地ホスト国がするという不平等な地位協定の見直しを沖・韓・日が「連帯」することで訴え、問題解決に努めようという明確な目標に向かって、私達はこれまでにないといつともなく大きな一歩を踏み出した。

注1…1955年、当時6歳の永山由美子ちゃんが米兵に惨殺された事件のこと

注2…日本復帰前嘉手納基地周辺で日本復帰前、航空機燃料が地下に染み込み「燃える井戸」が出現した

注3…韓国では冬のキムチ作りのことをこう呼ぶ

★ おやかわ しなこ 親川 志奈子 琉球大学からロンドン大学東洋アフリカ学院の修士コースを終え、昨年帰沖。この4月から琉球大学大学院に復学。専門は言語学と言語教育で、危機言語の記述と復興、特にウチナーグチ(沖縄方言)の記述と継承。米軍再編についての日米政府による暴力的合意を拒否し、抵抗運動の思考を鍛える場を生み出す「合意してないプロジェクト」に所属。

特集／2008年沖縄・日本・韓国共同 米軍基地環境調査研究国際シンポジウム

～当日の講演内容から～

「沖縄の基地問題概説」

桜井 国俊（シンポジウム共同代表／沖縄大学学長）

SACO合意で嘉手納以南が帰ってくることが決まったが、その返還予定地について様々な問題が予想される。

63年前、沖縄戦で軍隊は市民を守らないということがわかった。不発弾の処理にあと100年がかかるだろうと言われている。戦後一貫して基地の被害に悩まされると同時にベトナム戦争や湾岸戦争に加担させられている。普天間基地の汚染が深刻。嘉手納基地周辺では繰り返し事故が起きている。さらに爆撃訓練等で自然は破壊されている。

返還予定地は様々な土壌汚染が予想される。北谷町のキャンプ桑江の北側、以前はレクリエーション施設だったが、思ったより汚染がひどく、その処理の義務は日本側にある。これは国民の税金で処理される。しかも米軍は情報を公開していない。

きょうの会場である沖縄国際大学は4年前に米軍ヘリが墜落した。汚染があったはずだが、米軍が周辺を封鎖したために、どういう汚染があったのかわからないままにうやむやになってしまった。

沖縄の環境問題の原因は基地の存在は、基地を容認する見返りとして公共事業にお金が出ている。しかし、この公共事業は本土の基準にのっとって行われるため沖縄の実情にそぐわない。

では市民はどうすればよいか？ まずはより信頼性の高い情報を得ること。そして建設的委員会を設置すること。米国では、地元住民、NGO、軍の代理としての契約企業が基地跡地の環境浄化について話し合う委員会がある。これに対して日米共同委員会は非公開で議論されている。

私たちは国際的なネットワークや協力をしながら、不平等な地位協定を改定させるよう働きかけるとともに、軍事活動に環境義務（汚染者負担の原則）を課すような国際法を作ることを目指すべきだ。

「人権・環境問題から見た普天間基地の問題」

伊波 洋一（宜野湾市長）

普天間は沖縄戦の最中にすでに滑走路が造られ、その後ずっと接收されたままになっている。多くの地主が契約を拒否しているが、強制的に使用され続けているのが現状だ。普天間飛行場周辺には9万人の市民が居住し、121箇所以上の公共施設がある。



この上空を日常的にヘリや飛行機が飛んでいるわけで、米国では考えられないことだ。このような状況が続く限り、この沖縄国際大学へのヘリ墜落事故のようなことがいつ再発してもおかしくない。1996年に普天間基地返還の日米合意がなされたが、それ以後も同様な状態が続いたままだ。1996年には年間2万回だった飛行回数が2003年には1.5倍に増えている。いまでも連日、深夜11時までヘリが飛びまわっている。そもそも日米地位協定第三条3項は、「合衆国軍隊が使用している施設及び区域における作業は、公共の安全に妥当な考慮を払っておこなわれなければならない。」とされているが、現状がそうっていないことは歴然としている。

米国内では軍事施設にも国内環境法が適用され、航空基地については海軍及び海兵隊基地に適用される「航空施設整合利用ゾーンプログラム」によって地域の安全が保たれている。しかし日本政府はこれを米国内の基準に過ぎないとして普天間基地への適用を否定し続けている。

「ジュゴン判決の意味」

加藤 裕 (弁護士)

サンフランシスコ連邦地裁ジュゴン判決は原告（沖縄・日本・アメリカの個人及び環境保護団体、ジュゴンなど）が被告（国防総省と国防長官）に対し請求したもの。米国国家歴史保存法（NHPA）



は元々、アメリカ国内の文化的遺産を守るためにできたものだったが、現在では外国の文化遺産にも同等の配慮を求めることが可能になっている。これと同じ意味の日本の法律は「文化財保護法」にあたる。この日本の法律でもジュゴンは「天然記念物」として保護が認められている。この場合はジュゴンへの保護への配慮も命じているが、辺野古への米軍新基地建設において米国政府は配慮を行っていないので、その事実の確認を求めるというのがその内容で、2003年9月に提訴された。

今年1月に下された判決の結論は、第1に米国政府の行為はNHPAに違反していること、第2に米国政府による「配慮」がなされるまで訴訟を継続させること、第3に米国政府に対して「配慮」のために必要な情報開示を90日以内に求めることとなった。「配慮」(take into account)とは、遺産の特定、情報を明らかにすること、悪影響の判断、代替案等の評価、他者との協働と解釈される。90日以内とは4月下旬が期限だ。

この判決は画期的である。アメリカの裁判でジュゴンや外国の自然保護団体が原告となり得る資格適格意義は次の2点にある。環境保護という観点から基地建設をストップさせる展望を切りひらいたこと。日本とアメリカの環境保護団体・法律家の連携で、グローバルな環境法適用の道を切りひらいたこと。

「辺野古新基地建設と違法な環境アセス」

真喜志 好一 (沖縄環境ネットワーク世話人)

1995年に起きた少女暴行事件の後、日米両政府は95年11月「沖縄に関する特別行動委員会」(SACO)

を発足させ、96年4月、県内への移設条件付基地返還を謳った中間報告を出した。わずか5ヶ月足らずで普天間返還という重要課題が決められたことに疑問を持った私たち市民グループが調査した結果、SACO合意とは基地返還と見せかけ、実は米軍基地を「統合・強化・近代化」する計画だと結論付けた。

SACO合意文書のばらばらな返還基地リストを米軍側に立って整理すると3つのグループに分類できる。第1は基地の近代化を図った施設群。第2は米軍の長期計画を隠し「沖縄県民の要求だから」と説明されている那覇軍港と普天間飛行場の移設条件付返還。第3は新鋭機オスプレイの訓練場。

2007年8月に公告縦覧された辺野古の「方法書」は事業内容が不明で、沖縄県環境影響評価審査会からも厳しい意見が出た。それを受け沖縄防衛局は今年2月に膨大な「追加・修正資料」を沖縄県に提出したが、これはアセス法28条「事業内容の修正」に相当し、方法書からやり直すべきだ。

高江のヘリパッド建設においても、アセス方法書を出した後に、G地区ヘリパッドから宇嘉川河口に向けての歩行ルートを示し、評価書縦覧後に今度はN1地区H地区の作業用道路を追加した。これらも同様に方法書からやり直すべきだ。

「枯葉剤とダイオキシン」

伊波 義安 (琉球諸島を世界自然遺産にする連絡会)



2007年7月の新聞報道で、米軍がベトナム戦争で使用していたダイオキシンを含む枯葉剤を、1961～62年に沖縄本島北部にある米軍北部訓練場などで散布、作業に携わった元米兵が前立腺ガンの後遺症に認定されていたことが分かった。

「生物の宝庫」と言われる北部地域での枯葉剤使用が明らかになったことに強い憤りを覚える。

沖縄では戦後米軍に占領されて以降、基地内で枯葉剤をはじめとする数々の有害化学物質による環境汚染が進行していることは明白だが、残念なことに

日米地位協定によって、基地内の環境汚染については何も手が出せないのが現状だ。

問題は、県民の「いのちの水がめ」「生物の宝庫」に散布されていること、北部訓練場で米軍が何をしているのか、県民には全く知らされていないこと、実験散布や除草剤として沖縄で使われた疑いがあることなどが挙げられる。国、県、県議会は枯葉剤の散布場所、量、時期、環境への影響等を徹底的に調査し、県民に明らかにすべきだ。

「キャンプ・コートニーにおける鉛汚染」

内海 正三（沖縄環境ネットワーク）

2001年2月、沖縄本島中部の旧具志川市（現・うるま市）にある「キャンプ・コートニー」水域のヒジキ漁が、米軍のクレー射撃による鉛汚染によって規制されていることが報道された。沖縄環境ネットワークは2002年からプロジェクトチームを作って独自に調査を始め、2003年4月から5月にかけて石川漁協や独自に入手した影響地域を含む周辺岩礁域で収穫されたヒジキを分析した結果、他の地域で見られる小型の貝の種類が欠けていることが判明した。しかし多くの化学物質が流入しているため、それがクレー射撃による鉛汚染とは特定できなかった。

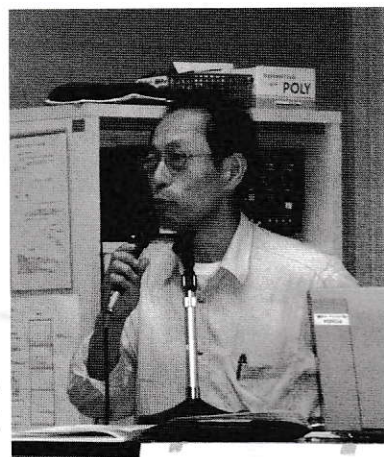
日本では非政府系のNGOが鉛の銃弾を入手すること自体が困難で、分析費用や時間の面で多様な条件下での解析ができない。また地域社会でのヒジキの摂取量調査でも、個々人の年間摂取量があやふやで、本来なら対面して個別に確認すべきことも、風評被害を恐れる感情もあり困難で、正確な摂取量の算定はできなかったが、その制約された範囲でも、海水中で鉛弾からの溶出を確認でき、住民アンケートでは、一般家庭とは比較にならない大量の自家消費が確認された。

抜本的な解決には、千葉県で先例があるが、クレー射撃で蓄積した鉛を除去（クリーンアップ）すること。また米軍基地の使用物質の履歴を県と地域住民に公表することが、返還後のクリーンアップや跡利用には不可欠である。しかしながら安保条約に基づく日米地位協定では提供地域の管理が米軍に委ねられているため、米軍にその義務はない。日米地位協定の改定がなされなければ問題解決にはならない。

「神奈川の基地群の現況」

沢田 政司（相模原補給廠監視団）

神奈川県にある主な米軍施設だが、まず在日米海軍の横須賀基地があり、これは海外に母港を置く唯一の場所だ。そこから国道16号線に沿って北上すると、国内最大の住宅専用基地である池子住宅や厚木基地、キャンプ座間、相模原補給廠そして神奈川ではないが横田基地

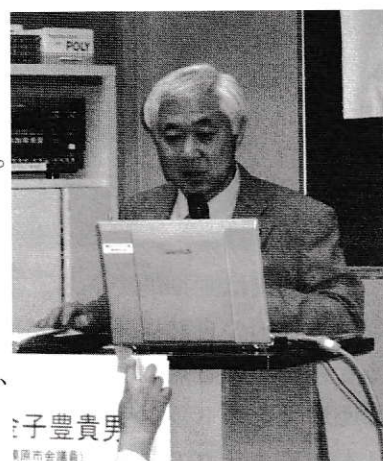


など、約60キロの距離の間に在日米軍の司令部機能が集中している。沖縄では珍しくないかもしれないが、本土の感覚で言うとうごく高密度に集まっているという感じだ。相模原補給廠は巨大なゴミ置き場であり、有毒・有害廃棄物の受け入れ、処理部門もある。中でもPCB廃棄物は深刻な国際問題だ。また相模原補給廠ではアスベスト問題もある。

「厚木基地をめぐる環境問題 騒音被害」

金子 豊貴男（相模原市議会議員）

厚木基地は唯一の「米海軍」の航空基地であり海上自衛隊と共同使用している。横須賀に入港する航空母艦が積載している戦闘機が離着陸する飛行場という意味もある。ここは戦前、首都防衛の基地として造られたもの。飛行場の滑走路を空母の飛行甲板に見立て、戦闘機が連続して離発着の訓練を行っている。連日連夜の騒音被害はすさまじい。



相鉄線のトンネルと東名高速道路大和トンネル（渋滞のアナウンスで知られている）は厚木基地からの墜落事故対策で設置された。部品落下などは日常茶飯事。最近ではヘリコプターの不時着事故が相次いでいる。

「横須賀基地の深刻な汚染」

滝川 きみえ（横須賀市議会議員）

米海軍横須賀基地はキティホーク（空母）の母港であり、米国が海外に母港を置くのは唯一日本のみである。1986年横須賀を母港としていた空母ミッドウェイの大改修によって生じた廃棄物を業者が放置しアスベストが



問題となった。さらに90年代に入ると、海岸埋立のために掘り起こした土がPCBや重金属で汚染されている実態が判明した。原因は12号バース（埠頭）背後のオイルタンクや、バースに埋設されたガソリン貯蔵庫の老朽化にあった。

1997年にこの12号バースを延長し、原子力空母配備のための関連施設を建設する計画が動き出した。12号バースの汚染状況は驚くべき深刻さであるにも拘わらず、汚染の封じ込め工事は着工され、現在延長工事は終了している。

「群山（クンサン）米軍基地の油汚染事例」

ユン・チョルス（わが土地米軍基地取戻し群山市民の会）



群山米空軍基地は面積約313万坪で米軍約2,800名が駐屯している。F16など60の戦闘機と、約40km離れたチク島爆撃場を備えている。

60年以上の駐屯の結果、燃料施設の老朽化による油汚染が深刻である。2003年

3月燃料貯蔵タンクのフェンス前の田に油が浮いて悪臭が発生したが、汚染源が基地内という理由で米軍側は汚染源確認を拒否した。

市民の会の努力により2005年韓米共同実務委員会が調査を実施、汚染が確認された。この間発癌物質

で汚染された飲料水は近隣住民に飲料水として使用された。

「平澤（ピョンテク）基地と環境被害」

カン・サンウォン（平澤平和センター）

ピョンテクには米軍再編によって2013年までに在韓米軍司令部と米2師団など大部分の米軍基地が移転し、市面積の5.9%に達する基地建設が予定されている。また、現在約9千名いる米兵の駐屯が2万2千名に増員される。

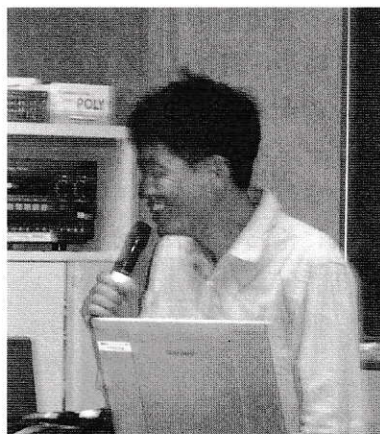


50年間にわたり戦闘機とヘリの騒音・振動に悩まされてきたが、再編によってさらに1.7倍の被害が予想される。2002年に市民団体と周辺住民による騒音訴訟が起こされ、今年6月には控訴結果が出る予定だ。被害が認められるのは当然だが、法律が根本的な問題解決になるとは思わない。やはり米軍撤去に向けての直接行動しかない。

「韓国の返還米軍基地環境汚染」

ソ・ジョチョル（韓国緑色連合／グリーンコリア）

米軍再編により韓米両国は2011年までに60以上の米軍基地を返還することに合意した。それらの多くはピョンテクに移設される。それらの返還地で土壌汚染、地下水汚染、油汚染などの深刻な環境被害が発見された。



2007年に現場を訪れた国会議員は鼻をつく油のにおいと地下水汚染に驚き、「ここは油田なのか」といわれたほどだ。

S O F A（韓米地位協定）は不平等な韓米関係の象徴だ。これによって総額7,200億ウォン（約720億

円)の汚染浄化費用の負担を国民に押し付けようとしている。新しいイ・ミョンバク政府の方向性からして、2週間後の韓米会談では、米が望む通りに協定が結ばれることが予想される。

2007年の世論調査の結果では、国民の80%が「浄化費用は米軍が負担を」と出ている。国民は環境汚染には関心が薄い、浄化費用の額には驚いている。今後この問題は韓国においてパンドラの箱になるだろう。

「辺野古の状況について」

安次富 浩 (ヘリ基地反対協議会代表)

3月17日から環境現況調査という名目で調査が始まったのだが、たまたまこの日にジュゴンが現れたので中止になった、政府はジュゴンに配慮しているという姿勢を見せるために調査にしているに過ぎない。この間、一週間の米軍演習などもあり、実際に調査されたのは二週間ほどだ。いままでだと土日はやらなかったのだが、いまは連日調査している。

本調査に入ると、日の出1時間後、日没2時間後という環境配慮を守らせなければならない。去年は朝4時から調査に入ることもあった。事前調査はジュゴンの配慮等何もなかった。いまはとりあえず配慮のポーズは見せている。

いまは生物調査が中心。海岸にロープを引いて、それに沿って沖に向かってダイバーが潜り調査している。時には小舟も使っているが、いいかげんで形式的なものだ。私たちはカヌーやゴムボートでこれを阻止している。一年間の調査と言われているので、これをいかに阻止するかが課題だ。

5月から大型機械が入ってくると思われるので、これも止めなければならない。去年この大型機械を配置する際に自衛隊の艦船がやってきたが、今年も来るかもしれない。海上保安庁は組織を強化し人員を4倍に増やしている。『調査をスムーズに行うために(業者に)協力する』と断言しているので、こ



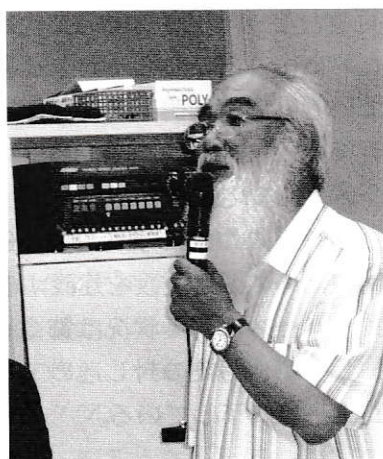
こが山場となる。しかし海に潜れるメンバーが不足しているので、一緒に潜れる人たちを含め、皆さんの協力をお願いしたい。こちらでも独自に調査をして、それを対比して向こうの調査のずさんさを指摘することも大事だ。

先日、辺野古の浜の鉄条網に付けられた基地反対のリボンが焼かれた。米軍がやったことは明らかだ。今度はもっとリボンを付けて怒りを表そう。5月25日は座り込み1500日の記念の日なので、みんな集まって下さい。

「連帯の挨拶」

ムン・ジョンヒョン(牧師・ピョンファ・パラム/平和の風代表)

数日間沖縄に滞在して米軍基地を見てまわって、とても韓国の状況に似ていると思った。米軍が引き起こしている問題が全く同じだと思った。心の底から怒りが沸いてきている。皆さんも同じでしょう。現地で聞いている



方たちの声を聞いて、心から共感できた。韓国の共同訓練には、沖縄はもちろんアラスカやヨーロッパからも来る。アメリカは世界中が自分たちの基地だと思っている。いま私たちの連帯が本当に必要なのだ。兵器に対して、私たちは歌や踊りで対抗していくのだ。一緒に戦っていきましょう。

このほか、東村高江のヘリパッド反対運動の現場からの発言や、「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」から、米兵による女子中学生暴行事件を糾弾する特別報告があり、今回のシンポジウムの共同代表である沖縄国際大学の佐藤学教授からまとめの挨拶があったが、紙面の都合により割愛させていただきました。

●●● シンポジウム東京行動レポート ●●●

「2008年沖縄・日本・韓国共同米軍基地環境調査研究国際シンポジウム」を終えた直後の4月14日、参加メンバーの一部が東京へ飛んだ。今回の成果と展望を、国会記者（参議院会館）及び海外特派員（プレス・クラブ）で報告するためだ。以下はそのレポートである。

国会とプレス・クラブで記者会見

4月12日に沖縄国際大学において開催した『沖縄・日本・韓国共同の米軍基地環境調査研究国際シンポジウム』について、沖縄・韓国・日本それぞれの代表が国会及びプレス・クラブに出向き、国会担当記者及び海外プレスの東京特派員を対象に記者会見を持った。韓国グリーン・コリアの徐載哲（ソ・ジェ Chol）、神奈川・厚木爆音訴訟団の金子豊貴男、沖縄・普天間爆音訴訟団の高橋年男の3名が出席した。

国会（参議院会館）では、地元沖縄の二つの新聞社をはじめ、米軍基地が駐屯する神奈川、東京、中日新聞、そして教科書検定問題で沖縄問題に注目する岩波書店も取材に来た。海外特派員向けのプレス・クラブでは、スウェーデン、ドイツ、シンガポールの特派員が沖縄の声が聴けるからと関心を持って参加してくれて、質問もたくさん飛び交った。

国会記者会見では通常、基地問題の記者会見にはほとんど関心を示す新聞社はいないよ、と聞いていた割には、「それなりの形になるぐらい取材に来ていたね」と金子さんの評価。

記者の質問は、韓国の返還される米軍基地の環境汚染を浄化するのに、どれくらいの費用がかかるか？ 新しく就任した李明博（イ・ミョンバク）大統領の下で、その費用負担の問題ではアメリカとの関係はどうなるのか？ など、グリーン・コリアの徐載哲さんに集中した。

沖縄発の報告に海外メディアが強い関心

海外特派員向けのプレス・クラブでは、記者会見を特派員に通知する段取りが不十分であったため、上記3ヶ国のみ参加となったが、どの特派員も事前にきちんと記者会見の内容が通知されていれば、みんな沖縄の問題に関心を持っているので、もう一度会見を持ってはどうかと、アドバイスを受けた。

海外メディアが入手する沖縄に関する情報は、日本の中央メディアが流す情報しか掴めないのが実情だとのこと。2月に起きた女子中学生暴行事件とそれに対する反応をはじめ、なぜ、沖縄現地で報道されていることと日本（東京）での情報に食い違いがあるのか、不思議でしょうがないと質問があった。沖縄の本当の声は、現地に行かないと得られないものだという問題意識はあるが、東京（中央）を空に

して沖縄にしょっちゅう行くわけにもいかないので、こういう形で沖縄発信の記者会見を持つ機会を増やしてほしいということであった。

なお、韓国国内では60年に及ぶ長期間の南北軍事緊張のため、軍事にかかわる問題提起がしづらい社会環境が今なお継続している。韓国国内では明らかにしづらい米軍基地の環境汚染とその解決に向けた国際的な努力があることを、日本のマスコミのみならず国際メディアに訴えることができたことは、米軍基地に対する韓国国民の取組みを、ささやかではあるが内外に伝える契機にはなったのではないかと思う。シンポジウムの開催も含めて、国際協力による共同調査という取組みを今後とも発展させていきたいものだ。（記・高橋年男）

以下、プレス・リリースから今後の展望についての部分を抜粋して掲載する。

このシンポジウムを通してはっきりしたことは、アメリカは自国における環境基準について定めた基地の運用基準を、沖縄・日本・韓国においては全く無視し、駐留先各国ですさまじい環境破壊を引き起こしているということでした。私たちは被害の実態を目の当たりにし、大きな衝撃を受けました。また、韓国民衆が闘い取ってきた韓米地位協定の改定により環境条項の面では、韓米地位協定は日米地位協定よりも米軍の汚染浄化の責任を明記している点において高い評価を受けていましたが、実際の運用においては、米軍はその責任を全く果たしていないことも、このシンポジウムにおいて明らかにされました。

私たちは、今回の共同調査及びシンポジウムの成果をふまえ、米軍基地の環境調査研究を今後とも継続していくことを確認しあいました。そして、米軍による環境破壊の実態及びその原因でもある米軍のアジアにおけるダブル・スタンダードを糾していく活動の一環として、国際機関に訴える活動も共同して強めていこうと考えています。

人権と環境をテーマに、人類普遍・世界共通の基準をつくりあげる、国境を越えた連帯共同の活動にご理解を訴えます。

2008年4月14日 シンポジウム実行委員会

2008第一次沖縄平和紀行から帰って①

いちご (「クンサン・ピョンファ・パラム」
群山平和の風ボランティア)



沖縄に行くまでとても悩んでいた。しばらく忙しくなる時期に、沖縄へ5日も滞在することに、ちょっと気乗りがしなかった。しかし、なぜだかどうしても行かねばという思いが私を引っ張り、幸いにも周りの仲間たちの配慮と承諾(?)で、沖縄行きを決心することができた。

朝早く人ごった返す仁川空港は、とても異色だった。みんなの旅行の喜びと興奮にみちた仁川空港の雰囲気から、沖縄平和紀行が始まった。私にとっては初の海外旅行でもある今回の紀行は、韓国から離れるんだということ自体で、私に大きな興奮を抱かせた。このような興奮は飛行機に乗っても続いていたが、いつもはバイキングさえうまく乗れない私にとって、飛行機の小さな震えさえ我慢するのが辛かった。「こんな、これってとても恐ろしいじゃない」と、心の中で連発しながら、前日は1時間しか眠ることできなかった上に、到着時間だけを待ち望み、全身が緊張したまま空を翔けて沖縄に到着した。

沖縄は「済州島のような風光に、群山の風」という表現がよく似合うところだと思った。空港まで出迎えに来た沖縄の平和活動家たちと挨拶をかわして、初めての昼食を取った。昼の食事で、沖縄と日本が違うんだという思いを初めてもつようになり、こうした考えは金城実さんのアトリエで開かれた交流会で、いっそう明確になった。

韓国と似た歴史をもっている沖縄は、日本ではあるが日本ではない、そんな島として近づいてきた。平和を愛し、武器を持たなかった琉球王国で暮してきた人々が、日本の侵略を受け、その後アメリカの影響下におかれ70年代に再び日本に戻るまで、その多くの歴史はまさに韓国の歴史ととても似かよっていた。その過程で、お互いがお互いを殺し殺される歴史があり、それを語り、語りきれずに生きてきた数十年の歳月があった。私は沖縄戦の歴史と米軍基地について聞きながら、平和ということがどういう

ことなのか、しばらくの間、悩んだ。

沖縄の平和紀行を語ろうとすれば、美しい沖縄の自然を話さない訳にはいかない。美しい海と山をもつ沖縄は、多様な動植物が共存するところであった。美しく広がるブロッコリーの森と辺野古の三色の海は、永遠に忘れることはないだろう。自然の美しさと神秘に感動しながらも、一方では、私たちが守ることができなかったことなどが思い起こされた。美しかったセマングムの干潟と海、大秋里(テチュリ)の広々とした平野の赤く染まった空が、心から離れることはなかった。辺野古を守ることができなかったなら、とてもとても残念で、また、どんなにか涙に暮れることになるだろう。それゆえにこの自然とこの平和を、あるがままに守っていかなければという思いが、いっそう強くなった。

美しい自然と、ふさわしくない鉄条網の中に限りなく広がる米軍基地を見渡しては、遠く、平澤の痛みと群山の悲しみが感じられるのは、何故だろう。このように違っていながら、同じ二つの国の問題を、どのように思い悩まねばならないか、いつも頭から離れなかった。本当の平和が何なのか、また、それを守っていくために私たちがなすべきことが何なのか、ずっと考えて、また考えた。悩みをとく鍵は、すぐそばの沖縄の平和活動家から見つけることができた。それはすなわち、情熱と連帯だ。

4泊5日の日程の中で、いつも情熱的に通訳し、お互いが通じ合えるよう努力していた先輩の活動家たちの姿に、私の悩みをとく鍵を見つけることができた。このように心の中に深く平和を願う人々が、ともに連帯することができれば、一緒に闘うことができれば、私たちが乗り越えることのできない壁が、どこにあるのか。

自由と平等の国が私自身の国籍だと話していた漢子さん(ヨンジャオンニ/沖縄滞在中に同行してくれた通訳の金漢子さんのこと)の言葉のように、連帯を願う人々には国籍はない。ただお互いが本当に望む自由と平等、平和だけが私たちに必要なだけだ。心と心が通じれば、言葉が違っていても、顔形が違っていても、私たちはいつでも会うことができるんだということが、今回の紀行で私が得た一番大きな財産だ。心と心が通じるそのような連帯運動を通して、私たちの平和を一緒に守り進んで行こうと思う。

平澤(ピョンテク)、群山(クンサン)、沖縄のために、ひとつにひとつに！

2008第1次沖縄平和紀行から帰って②

李相守 (イ・サンス)

(金属労働組合マンド支部平澤支会 統一委員長)



沖縄平和紀行という話を始めて聞いてからは、日本という国について改めて考えるようになった。

今だに、私の心の一角を占めている過去の歴史と現在の反省のない歴史歪曲によって生じたあまりよくない感情を抱いたまま、

4月10日、沖縄に向かう飛行機に、旅行に出かける気分で出発した。

那覇空港に到着し、入国手続きを終えて、空港の外に出て見ると、なにか日本ではない、濟州島にでも来たような感じを受けたものだった。

空港に出迎えに来てくださった泉さんとヨンジャさんは、初めて会うのに初めてのようではなくて、久しぶりに会った友人のように接してくれる姿に、見知らぬことによる緊張が少しずつ消えていった。

最初の日程である沖縄県庁での記者会見を終えて、読谷の金城実さんの作業室で、沖縄反戦団体と交流をもつことになったが、参加された現地の方たちは、私たちが持っている理念や考えが同じだという思いをもったが、ちょうど金城さんが、国籍は違えども、一つの目標に向かって行く同志だという言葉の共感を覚えた。

見知らぬところでの初めての夜は、いい方々と出会えたことと、これからの日程で新しい方々と出会うことができるんだという期待のうちに、ヌーガヤ民宿で一日の日程を終えた。

二日目は、宜野湾市役所で伊波洋一市長と面談をすることになっていて、私たち一行の誰もが想像できないことが起きたのだが、それはまさに市長が私たち一行を喜んで迎えてくださって、市役所で米軍問題として発生する全ての問題と今後の対策について詳細に説明してくれる姿を見ながら、一方ではうらやましいという思いをもったりもした。

私が住んでいる平澤市長も、あのような考えと行動をとったなら、大秋里(テチュリ)の問題もどれほどか良くなっていなかったかと、考えてみるようになった。

二日目から、米軍基地による問題が起きた地域を踏査しながら、たくさんの住民や対策委員会を訪問したが、行く先々で、友人のように、兄弟のように接してくれる姿に接し、出発するとき持っていた心のおり(沈殿物)が消えて、自分でも気づかないままに彼らの中に自然と近づいていっていた。

最初は、日本語の勉強でもしながら時間でもつぶそうかとしていた私の心が、みっともなく感じられ、彼らを日本の人たちだと遠ざけていた考えが恥ずかしく思え、違うんだということに気付かされた。

しかし今では、彼らは私にとって、田舎にいる親戚のおじさんや兄弟のような懐かしい人たちとして、心の中にいるようになった。

泉ヒョン(兄貴)、兪漢子ヌニム(姉さん)、昌一ヒョンニム(兄さん)、金城サンチョン(おじさん)など、みんな、いとしく感じます。

これからも、いい席、いい所で、もう一度、会いたいですね。



沖縄から戻って思うこと

クオン・オキ（駐韓米軍犯罪根絶運動本部ボランティア
／在米僑胞）



沖縄への旅で、この南の島が美しいところだと知った。「ブロッコリーの森」と誇らしげに呼ばれているみずみずしい緑の森、ざらざらした砂浜、緑や青で8色に変わる海の水。マヨネーズであえたゴーヤー、パイナップル、ジーマーミ豆腐、紅芋。

私たちは、韓国語、日本語、琉球のメロディー、活き活きとした表現、大げさな英語、伝えたい一心のジェスチャーで、私たちだけのまぜこぜの言葉を生み出しながら、沖縄の仲間たちと笑いあった。

私は沖縄への旅で、頼みごとや見返りなしの関係の思い起こした。アメリカはどれだけの金を使って、その脅迫的で、しかも根拠のうすい資本主義帝国を維持しようとしているのだろうか？ 情け容赦のない軍国主義は、貪欲な多国籍資金を求めて、拡大し続ける市場を確保するために、どれだけの金を使って、コミュニティを窒息させ、社会を破壊しているのだろうか？

初めて那覇に着いた時、基地の圧倒的な存在が、私たちの乗ったバスの厚いガラス窓を通して私たちに向かって叫んでいるようだった。私は口をあぐり開けて、灰色のフェンスの向こう側に垣間見えるコンクリートのベージュの建物や、よく手入れされた道路を見つめた。

上手にコピーし移植したかのような北米風の郊外の景色は、威嚇的には見えなかった。何マイルにもわたり続く有刺鉄線を見て、私は不思議に思った。

「お前たちは誰を守っているんだ？」

昼夜を問わず、軍用機が空を切り裂いた。次第に

名前をたどれなくなっていく。カデナ、フテンマ、フォスター……。外観もたどれなくなっていく。ゆっくりと動くトラックや格納庫が、車に乗っているうちにぼやけていった。初めは、基地の向こう側にあるものを見たり聞いたりすることができなかったが、すぐにそれらが実体のないものだということが分かった。幻影、ずっと存在してきてはいるが、超現実的な夢。たぶん無視（拒否）することができる。

状況が見えることと声を上げることには、どんな意味があるのだろうか？

おそらくは、一部の沖縄の人々にとっては、基地を見て見ぬふりをする、つまり受け入れることは可能だろう。というのは、「その中（基地の中）」の人たちと「この外（基地の外）」の人たちとの間には、ほとんど契約も対話もないからだ。

私は豊見山さんに、基地に入ったことがあるかと尋ねた。すると、周りの人たちが彼を自慢するように答えた。「もし、入ったら、彼はすぐに逮捕されるだろう。トミは基地には近づけないんだ」と。

基地を見ようとするたびに、ミステリーと悪魔がそれを覆い隠すようだ。だが、一方で活動家たちはスライドショーのバックグラウンド・ミュージックのような、沖縄の人々を苦しめてきた不正について述べた。私は、これらの人権侵害と運動の論理が、沖縄のそれなりに多くの人々に受け入れられるかということが分かった。バックグラウンド・ミュージックは、「保護（安保）」に対する当然の承認されたコストであり、兄貴分の我々に島の女の子を差し出すことで得られる「利益」なのだ。

チヘが緊張しながら、次のように説明した。「若い沖縄の人たちは、基地が好きだ。彼らはアメリカ人をカッコいいと思っている。英語をカッコいいと思っている。」

暴力を消して慈善に置き換えるイデオロギーを、明確に把握する方法はあるか？

沖縄での2日目、私は嘉手納空軍基地の友人を訪ねた。彼は、3年間、少尉として勤めることになったこの地について、ほとんど知らないようだった。その代わりに、新しい家探しに専念していた。「浜辺近くにあるのがいい。ドアを開けたら、すぐに砂浜を歩けるような。」彼は、米兵が地元の少女をレイ

プした後の、午後10時以降の夜間外出禁止令にいらだっていた。「沖縄の人たちにとっても、ためにならない。店主たちや地元の商店は、夜、客が来ないので、このところうまくいってないと聞いたよ」と文句を言っていた。

うるさく、耳をつんざくような乱流が、沖縄の人々とこの島を占領している兵士たちの間で衝突する。

何十年もの占領、「よき隣人としての基地」政策、プロパガンダの努力、日本政府の米兵に快適な家を提供しようという努力、全てが、占領する側と地元の人々との間にある大きく傷口の開いた誤解と、対話の欠落。もちろんこの沈黙は、米軍が世界秩序の中で慈悲深い家父長としての地位を維持するために意図的になされており、また必要なものなのだ。もちろん、この対話のないことに対して、何十年もの間に闘ってきた沖縄の人々がいる。

どうやって？ 私は昨年7月以来、高江の米軍海兵隊のジャングル訓練施設の外に設置したビニールテントで一人、時に友人と、ギターをもって座り込みをしている女性に、尋ねてみた。

「あなたは彼らと話しをしますか？」緊張が彼女の喉をとらえた。彼女は頭を振って言った。「私は英語を学ばなければならない。」言葉とフェンス、向こうと隔てるものがたくさんある。

後から、日の丸を燃やしたことと反基地運動及び琉球の自治の運動の中心的な活動家として有名な男性は、当惑した声でこういった。

「私は、そのような米兵たちと話したくはない」

私たちと同じだ。

沖縄と韓国がよく知られている類似点、つまり、米軍の占領と日本の植民地であったという「共通の歴史」意識は、今回の旅を通して繰り返されたテーマだった。酒を飲み、焼きそばを食べながら、韓国と沖縄の活動家たちは、軍事基地用の道路を造るための土地収用、騒音公害や住民たちが被る環境被害、米兵たちに保障された政治的法的特権など、いかに多くの事柄がありふれたものであるかということについて話した。しかし、「我々」、つまり地元民あるいは、無理やりドアをこじ開けられた人々と、「彼ら」、つまり侵略的な部外者、沖縄戦で地元の人々を残酷に殺した日本兵や、自分のものでもない土地

に家を買って土地を得た米兵たちとの間に引かれた明白な線は、しばしば危険な線のように感じられた。

何故危険なのか。私は、この問題を分析し、あるいは裁くために考えてこなかったし、今のところ十分に考える力もない（私は今、沖縄の蚊に咬まれたところを掻きながら、塩気を含んだ澄んだ空気を思い出している）。しかし、また、別の私がこうやって簡単に線引きすることが力関係や、今起こりつつある過程をはっきりさせることよりもむしろ、我々を混乱させるのではないかと感じてみているのだ。

日本の一つの県である沖縄における反基地の組織化と「独立した」民族国家としての韓国におけるその違いは何か？ 我々は何を持っておりお互いから何を学べるのか？

どうすれば、民族解放というレトリックや、家父長制、同性愛者への差別、(女性の)身体の商品化及び資本家の搾取からの解放を同時に要求し、歴史的に失敗してきたのと同じ失敗に陥らないためにはどうすればいいのか？

反基地論文、運動のレトリック、歴史的講話などにおいてオーバーラップする部分も確かにありはするが、沖縄における反基地運動は、韓国におけるそれと明らかに違っていた。この違いに対するある活動家の説明：沖縄と韓国におけるアメリカの軍事占領の骨組みと条件を形作る法律の構造と固有の政策が、鍵となる特定地域で違っていた。これらの違いは、別個の戦略キャンペーン及び両方の地域で発展してきた抵抗の形の説明となっていた。

他に理由はないだろうかと考えて見た。私は、世界的なシステムにおける沖縄の位置と押し付けられた役割について考えて見た。

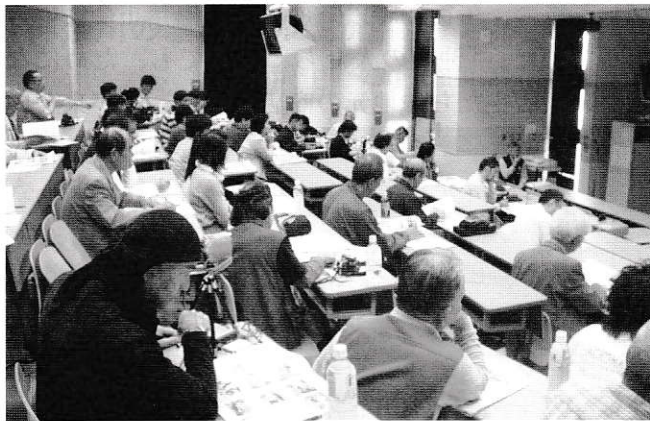
沖縄、日本の新植民地的サテライト
沖縄、米軍の行動戦略のための訓練地
沖縄、琉球の人々の豊かな土壌、歴史的に深く埋め込まれた恐れ—怒り—共犯—抵抗

沖縄での最後の夜、4月14日、飛行機が私たちの上を低く旋回し、私たちの耳の中で、私たちのコップの中で、ぶんぶんうるさい音を立てた。笑いは中断し、歌は止み、微笑が少し揺れた。

Okinawa! アー Okinawa!!



高江から報告に来て下さった佐久間 務さん



会場は満員で熱気にあふれた



中学生暴行事件についてアピールする本永貴子さん



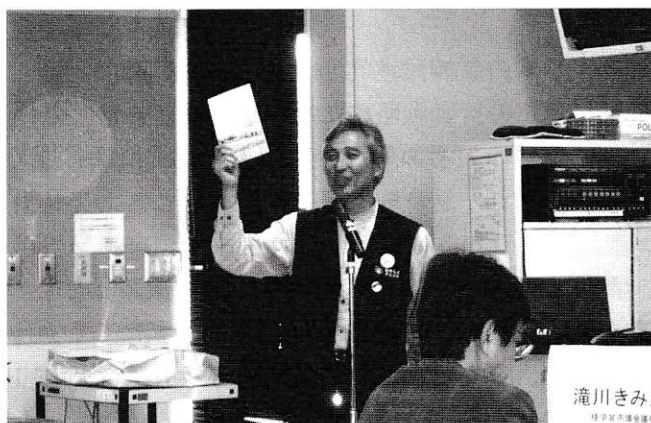
関連書籍の売上げも上々



昼休みに意見交換する発表者。右は伊波洋一宜野湾市長



盛り上がった夜の交流会



今回のシンポジウムの立役者、普天間爆音素養団の
高橋年男さん

4月12日の
スナップ

2007年度活動報告

4月1日	事務所移転
4月13日	「宇井純先生を偲ぶ会」報告会開催
5月15日	ネットワーク通信第35号発行
6月20日	ネットワーク通信号外発行
6月30日	2007年度総会
10月18日	沖日韓共同米軍基地調査の第一回準備会に参加
10月30日	沖日韓共同米軍基地調査の第二回準備会に参加
11月8日～12日	韓国からの米軍基地環境調査団と交流
11月22日～26日	駐韓米軍基地調査団のメンバーとして渡韓（照屋久子）
12月15日	ネットワーク通信第36号発行通信

2008年

2月16日	沖日韓共同米軍基地環境調査シンポジウムの第一回実行委員会に参加
3月7日	沖日韓共同米軍基地環境調査シンポジウムの第二回実行委員会に参加
3月20日	ネットワーク通信第37号発行通信
4月4日	沖日韓共同米軍基地環境調査シンポジウムの第三回実行委員会に参加
4月10日～15日	韓国および本土からのシンポジウム参加者と交流
4月12日	2008年 沖縄・日本・韓国共同 米軍基地環境調査研究国際シンポジウム開催

沖縄環境ネットワーク 2008年度事業計画案

事業計画

- 1 畜産排水処理技術（回分式活性汚泥法）の普及のための活動（マニュアル本の配布および全国へのPR）
- 2 環境影響評価（アセス）法・条例の研究と対策
- 3 内外環境NGOとの交流
- 4 一般市民向けの講演会や公開勉強会の開催
- 5 在沖米軍基地の環境問題の調査とその対策
- 6 エコツーリズム研究
(先進地コスタリカ訪問の成果を踏まえ、再度訪問に向けての学習と準備)
- 7 収益事業の継続拡大／沖縄環境ネットワーク叢書及び「沖縄のエコツーリズムの可能性」等関連書籍の販売促進、ほか

2007年度一般会計収支報告（暫定）

収 入

前期繰越	266,199
年会費	969,600
寄付金	514,000
書籍・資料売上	44,500
収入合計	1,794,299

支 出

人件費	1,260,000	（注1）
通信費	108,960	（注2）
消耗品費	16,432	
印刷費	81,420	（注3）
振込手数料	27,980	
その他		
・ 事務所契約関連経費	329,054	（注4）
事務所家賃	240,000	
電気代	8,953	
水道代	5,664	
電話代	74,437	
・ 亜紀書房買い取り分（公害原論合本3冊）	9,576	
・ プロバイダー契約料	42,210	（注5）
支出合計	1,875,632	

 -81,333

収支

注1：事務局員人件費（105,000×12ヶ月）

注2：通信発送費88640、領収証発送費および冊子郵送料19220、振替用紙加入者印刷費1100

注3：ニュースレター印刷費62000、請求用レター等の印刷実費1420

なお、通信発送用封筒費18000も便宜上ここに含む

注4：家賃・水道代・電気代を「岡本由希子事務所」「新沖縄フォーラム刊行会議」事務局と三分割
電話代はネットワーク単独での支払い

注5：インターネット及びメール用プロバイダーとの契約料金20790、ホームページ用のプロバイダーとの契約料金21420

※…この収支報告は会計監査を受ける前のものですので、暫定としております。

2008年度沖縄環境ネットワーク予算案（一般会計）

収 入

前年度繰越金	-81,333	
年会費（カンパ含む）	50,000	（2007年度実績から算定）
雑収入	514,000	（2007年度実績から算定）
小計	1,468,667	

支 出

事務局費	1,385,000	
人件費	765,000	（事務局員105,000×3ヶ月＋50,000×9ヶ月）（※）
事務局関連経費	350,000	（2007年度実績から算定）
通信費	150,000	（2007年度実績から算定）
印刷費	100,000	（2007年度実績から算定）
消耗品費	20,000	（2007年度実績から算定）
予備費	50,000	
小計	1,435,000	

後期繰越（見込） +33,667

（※）…事務局員人件費は2008年4月～6月までは従来通りとし、7月から新たな賃金の体系を実施予定

環境情報おきなわ (2008年6月～2008年8月)

◆「軍隊、そして私たち～

あなたは どう つきあいますか？」

生れた時からこの島にある米軍基地。

私たちが入れないフェンスの中で、“彼ら”は何をしているのだろうか？

なぜ事件はくり返し起こるの？ 今年2月の中学生暴行事件の判決が“3年”ってどういうこと？

ベトナム戦争で闘った元海兵隊のアレン・ネルソンさん、ダグラス・ラミスさんと、軍隊の暴力性を告発し続けている高里鈴代さんの三人を囲んで、一緒に沖縄のこれからを考えてみませんか？

アレン・ネルソン (元海兵隊員)

1947年NY生まれ。1966年、海兵隊員としてベトナム戦争に従軍。ベトナムへの途上キャンプハンセン(金武町)に駐留。除隊後に戦場体験によるPTSDに苦しみ、18年の治療を経て克服。現在、ベトナム戦争の語り部として日米両国で活動が続ける。著書に『ネルソンさん、あなたは人を殺しましたか』『そのとき、赤ん坊が私の手の中に』など。「Veterans for Peace (反戦元兵士の会)」会員。

高里 鈴代 (基地・軍隊を許さない行動する女たちの会・共同代表)

1940年生まれ。沖縄キリスト教短期大学卒。東京都立社会事業学校で社会福祉を学び、都婦人相談センター電話相談員、那覇市婦人相談員を経て那覇市議会議員に(無所属・4期)。95年、世界女性会議(北京)に参加してのち、「強姦救援センター・沖縄(REICO)」 「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」を発足。主な著書に『沖縄のおんなたち ― 女性の人権と基地・軍隊』など。

ダグラス・ラミス (元海兵隊員)

1936年サンフランシスコ生まれ。カリフォルニア大学バークレー分校で政治思想博士号取得。1960年に海兵隊員として沖縄に駐留。津田塾大学教員を経て、現在沖縄国際大学で教鞭をとる。主な著書に『憲法と戦争』『ラディカル・デモクラシー』、『反戦平和の手帖』(喜納昌吉との共著)、訳書に『もし世界が100人の村だったら』など。

日 時：2008年7月6日(日) 午後6:00～8:30

場 所：沖縄キリスト教学院大学チャペル

入場料：大人500円 学生300円 18歳以下無料

主 催 「軍隊、そして私たち」実行委員会

共 催 基地・軍隊を許さない行動する女たちの会
キリスト教学院大学宗教部・平和(びんふあ)会
・ヘリ基地反対協

お問合せ 携帯 TEL. 090-8291-7134 (実行委員会)

◆引き続き辺野古へのカンパをお願いいたします

名護市辺野古では、先日、座り込み1500日の節目を迎えました。長い闘いはこれからも続きます。これまでも増してのご支援をよろしくお願い申し上げます。カンパの振込先は下記の通りです。

●琉球銀行南風原支店 普通口座331-622

タカミネ チョウセイ

※カンパに関するお問合せは沖縄環境ネットワークまで

◆【書籍販売】 郵送します

◎『沖縄の環境と平和』1,000円

◎『沖縄から世界へ』1,000円

◎『沖縄からコスタリカへ～平和憲法とエコツーリズムの旅』1,000円

◎『沖縄型・回分式参加溝のすすめ』500円

◎『沖縄のエコツーリズムの可能性』1,000円

事務局 (098-861-1101) までお問合せ下さい

◆沖縄環境ネットワーク世話人会 参加自由です！

日 時：お問合せ下さい

場 所：沖縄環境ネットワーク事務所

年会費：個人会員：3,000円 学生会員：1,500円

家族会員：3,000円 団体会員：10,000円

特別賛助会員：100,000円

郵便振込先：(口座番号) 02010-9-20132

(加入者名) 沖縄環境ネットワーク



◆総会のお知らせ

本年度の総会を6月28日(土) 午後2時より、沖縄大学本館4階第会議室にて行います。会員の皆様のご参加をお待ちしています。



■編集後記■

4月に開催した沖縄・日本・韓国共同シンポジウムは、今号の報告にもあるように大変に中身の濃いものだった。韓国からの15名の参加者たちとは、シンポジウム後の交流会で多に盛り上がった。彼らの情熱とエネルギーの圧倒されつつ、国境を超えた横断的繋がり大切さを改めて感じた一日だった(哲)。

沖縄環境ネットワーク通信・第37号

2008年6月20日発行

発 行 〒900-0015 那覇市久茂地3-29-41

久茂地マンション401号

沖縄環境ネットワーク

TEL/FAX 098-861-1101

E-mail/netwind@atlas.plala.or.jp

発行人 桜井 国俊 編集 酒井 哲哉

http://homepage1.nifty.com/okikan/